プリンの田中さんはケダモノ。

Chihiro & Sousuke

雪兎ざっく

Zakku Yukito

EB

エタニティ文庫

目次

プリンの田中さんはケダモノ。　5

第一章　プリンの田中さん　6

第二章　もう一度ファーストキス　191

第三章　ケダモノの田中さん　257

書き下ろし番外編
憧(あこが)れの人　337

プリンの田中さんはケダモノ。

第一章　プリンの田中さん

1

ここは、文房具メーカー最大手・NINK（ニンク）の商品管理課。普段は和気藹々（わきあいあい）としているその一室は、現在ものすごくピリピリしている。

その空気を作っているのは——名越千尋（なごしちひろ）。いつもはにこやかな彼女は今、怒りに満ちていた。

千尋は大きな瞳と丸顔、そして小柄な体が相まって、二十三歳という年齢よりも幼く見られることがある。せめて髪型くらいは大人っぽくしようと考えて最近ショートボブにしたのだが、それもあまり効果を感じられないのが悲しい。

そんな千尋が目を吊（つ）り上げて、課長の机の前に立ち、彼を睨（にら）みつけながら呟（つぶや）いた。

「異動……？」

商品管理課長は、気まずそうに視線を彷徨（さまよ）わせて周囲に助けを求めようとする。しか

し、誰もが課長から目をそらし、助け舟を出そうとしない。

普段は癒（いや）し系とも評される千尋の形相（ぎょうそう）に、課内の人間は驚き、おののいていた。下手に関わると大変なことになる……みんなの本能がそう叫んでいたのだろう。

周りに味方がいないと悟った課長は、仕方ない——と小さく呟（つぶや）いて、薄くなってきた頭皮に手を当てつつ、ため息をついた。

「そう、名越には、営業一課に営業事務として異動してもらう」

「なぜですかっ!?」

バンッと課長の机に両手を叩きつけ、千尋は悲鳴（ひめい）のような声を上げる。

「私は商品管理課で、ものすごく充実した毎日を送っており、異動希望など出そうと思ったことはありません！　営業なんて花形じゃないですか。他に行きたがる人はいるでしょう!?」

「落ち着いてくれ！」

食ってかかる千尋を、両手を広げて制しながら課長は叫び返した。

千尋はいったん体を引いたものの、なおも課長を睨（にら）んだ。

課長は椅子（いす）を引き、そんな千尋と距離を取ってから、もう一度ため息をつく。そうして落ち着いたところで、千尋に異動辞令が出るに至った経緯を説明し始めた。

「営業一課は、即戦力が必要なんだそうだ。名越はうちの商品のことをよくわかってい

るだろう」

「もちろんです。愛してますから」

千尋は、自社で扱う商品――文房具を、この上なく愛している。

幼い頃から、文房具が大好きだった。何気なく使っている文房具たちに施された、あらゆる工夫の数々。色も形もすべて計算し尽くされた結果、あのペンや消しゴムになっているのだ。千尋もそんな、素晴らしい商品に携わる人間になりたかった。

その希望を胸に就職活動を頑張った結果、なんとその夢が叶い、短大卒業後この会社に入社できた。……まあ、第一希望だった開発部には、残念ながら入れなかったのだが。

それでも、この商品管理課に配属されたことが、千尋はとても嬉しかった。なにせ、すべての商品を把握し、管理するのが仕事である夢の部署。毎日が楽しくて仕方がない。

文房具が好きで好きでどうしようもなくて、千尋がこの会社に入ってきたことは、課長だって十分承知しているはずなのに。

営業事務の仕事はおそらく経費精算や見積もりの作成がメイン。商品に関わる機会はぐっと減るだろう。

自分の知識を課長に評価されていることはとても誇らしい。

だけど、なぜ、その対価が営業一課への異動なの？

これまで誠実に骨身を惜しまず頑張ってきたことが商品管理課から引き離される原因

なのか、そう考えた千尋はやり切れない思いで唇を噛みしめた。

千尋のそんな表情を見て、課長の眉がハの字に変わる。

しかし、申し訳なさそうな表情が垣間見えたのは、ほんの一瞬のことだった。課長はすぐに表情を切り替えて、千尋への説得を続けた。

「名越、だからこそ、だ。今度は営業部で、その力を思う存分に発揮してくれ」

表情を歪め、今にも泣き出しそうな千尋に向かって、課長は熱心に言葉を続ける。

「なあ、この文房具について、君の思いを語ってみたくはないか？」

予想外の課長の言葉に、千尋の眉がピクリと動いた。

――営業事務は、裏方仕事ばかりで自分が直接商品に携われることはないと思っていたが、そうではないのだろうか。

「お客様にうちの商品を売り込むことが営業一課の主な仕事だ。お客様に直接、この文房具のよさを語ることを仕事としている彼らに、このボールペンの機能を説明してみたくはないか？」

「それは……」

千尋は抵抗しながらも、心の片隅で自分の気持ちが揺れ始めていることに気がついた。

文房具を世界中のどんなものよりも愛している。

ＮＩＮＫに入社して三年。千尋は、自分がここに来てから発売された商品のことはす

べて事細かに記憶している。それがどんなに些細（ささい）なことであっても。
新発売の商品が市場に出回ってからも、さらに改良を重ねて生まれ変わっていく様子だって、すべてこの頭の中に入っている。
「名越、営業事務とは、そういう知識も必要とする仕事だ。君以上に、この役に適任な人間はいるかな？」
そう問いかけられた千尋は、キュッと唇を噛（か）んだ。
——そんなの、いるわけがない！

というわけで、千尋は来月から営業一課に異動することになった。
そんなある日の昼休み、千尋は同期の真紀（まき）と待ち合わせて、社員食堂で昼食を一緒にとっていた。
社員食堂は安くてボリュームもあって、しかも『本日のランチ』にはデザートまで付いているのだ！　だからわざわざ社屋（しゃおく）から出て外食する人間なんて、この会社にはほとんどいない。
ランチセットのデザートのプリンを片手にした千尋は、課長から最初に異動を聞かされた時とは打って変わって、今では異動する来月が待ち遠しいくらいだった。
異動を聞かされた後、さらに詳しく課長と話したところ、千尋の中に熱い気持ちが湧（わ）

き上がってきたのだ。そして千尋は確信した。
——語れる！　文房具の素晴らしさを朝まで！
その時の感動を思い出し、興奮のあまり、気がつかないうちに声に出してしまっていたようだ。
「さすがに朝までは嫌でしょ」
隣に座る真紀から、呆（あき）れた声が飛んできた。
彼女、楠木（くすのき）真紀は四大を卒業しているため、千尋と同期といっても一つ年上の二十五歳。
さらりと長い黒髪をかき上げながら千尋を見る真紀は、女の千尋でもどきりとするくらいのとびきりの美人だ。
この見た目に加えて入社試験の成績も抜群に優秀だったと聞く。会社側としては最終的に女性社員の花形部署・秘書課への配属を考えているらしく、その準備期間として総務課行きになったのだと同期の間ではもっぱらの評判である。
男性社員からも女性社員からも羨望（せんぼう）の眼差（まなざ）しを浴びている彼女は、入社当時、文房具について熱く語りすぎて孤立しそうだった千尋の相手をしてくれた唯一（ゆいいつ）の人間なのだ。
その理由を真紀は『なんか役に立ちそうだから』と言っていたけれど、それはそれでよしとする。合理主義者で毒舌家で、飾らないところも真紀の魅力の一つである。

『資料を見なくても手近に説明してくれる人間がいるのは便利だわ』
真紀はたいていそんな言い方をするけれど、千尋は自分の語りを聞いてくれる相手ができて嬉しかった。
今も興奮している千尋を横目に、いかにも総務課っぽいことを言う。
「さっき朝まで語るとか言ってたけど、無駄な残業はできないわよ」
高飛車に笑う姿すら絵になる美人って本当にすごいなと改めて感心しながら、千尋は声を上げた。
「え、営業って真夜中や、時には朝まで仕事してるって聞いたけど？」
首をかしげる千尋に向かって、真紀は眉をひそめた。
「どこのブラック企業よ、それ。確かに決算前は忙しいでしょうけどね。でもうちの社は人数もいるし、そんなことはないわよ」
ということは、……商品を売り込むためにありとあらゆる資料を熟読し、データを事細かく分析し、そして気づいてみたら朝だったなんて、妄想していたような日々は訪れないの？
電気代やら残業手当やらを管理している総務課にいる真紀が言うのだから、きっとそうなのだろう。
「そっかあ」

千尋だって別に徹夜をしたいわけではない。でも文房具については語りたい。データをまとめながら一晩中語りたい。でも、それはどうやら異動先でも無理らしい。
だったらこの文房具への愛についてはいつ語ればいいんだろうかとぼんやり考えていると、突然腕をグイッと引っ張られた。
「それより！」
愛する文房具を『それ』よばわりしないでくれと千尋は思わず反論しかけたが、真紀が真面目な顔を近づけてきたので、開きかけた口を慌てて閉じた。
こういう時の真紀の邪魔をすると怖いのだ。
「営業一課には、イケメン御三家がいるのよ」
すでにランチを食べ終えていた真紀が、トレーを押し退けて千尋に迫ってきた。
会社の花形部署といえば、やはり実際に物を売り込んで仕事を取ってくる営業部だ。
ＮＩＮＫの営業部は企業を担当する営業一課、小規模店舗を担当する営業二課、各種団体などを担当する営業三課から成る。その中でも、大口の取引先である企業を相手にしている一課はエリート中のエリートといえる。
そして、そのエリートの中にあって、ひときわ頭脳明晰でしかも容姿端麗な男性社員三人のことを他の社員たちは『イケメン御三家』と呼んでいる。
——と、いうことは千尋も知っていた。

だが、これまで千尋が所属していた商品管理課は、在庫を保管している倉庫に近い地下にある。営業部は五階にあるので、千尋が営業部の人間と顔を合わせる機会はほとんどなかった。ちなみに真紀が所属する総務課は受付を兼（か）ねるため一階にある。真紀は受付の当番の時に、その噂の『御三家』を見かけたのかもしれない。

そんなわけで、千尋がたとえ営業部の人間に会っていたとしても、廊下ですれ違う程度。数百人を収容する社屋（しゃおく）の中では、誰がどの課に所属しているかなんてまったく知らない。

しかも千尋は人の顔を覚えるのがそもそも苦手なので、「知っている人」以外の人の顔はみんなへのへのもへじに見えるのだ。

だから『イケメン御三家』とか言われても、千尋には顔が思い浮かばないし、ほとんど興味も持てなかった。

千尋がそう考えていたら、気持ちを読んだらしい真紀が呆（あき）れ声を上げる。

「そんなだから彼氏の一人もできたことがないのよ」

――それはちょっとひどいんじゃないのか？　なんてことを言うんだ。

別に恋愛に興味がなかったわけではない。ただ、告白しようと思うほど好きになった人もいないし、趣味の雑貨屋巡（めぐ）り以上に恋愛に気持ちを傾けることがなかっただけ。もちろん、告白されたこともない。

……という、千尋の恋愛遍歴（へんれき）（？）についてはさておき。とにもかくにも、千尋はそのエリート集団、営業一課に配属されたのだ。

「ねえ、プリンなんか食べてないで、もっと真剣に聞きなさいよ！」

でも、こっちがプリンを味わっている最中に話し出したのは真紀のほうだし、その言い方はちょっと勝手すぎるのではないか。そんなことを思いつつ、千尋はのんびりとプリンを口へ運んで堪能（たんのう）していた。すると真紀はそんな千尋を睨（にら）みつけながら、ぽつりと呟（つぶや）いた。

「情報がほしいのよ」

「は？」

千尋は、真面目に驚いてしまった。

「情報って、そのイケメン御三家の？」

「そうよ」

深々とうなずいた真紀を、千尋はまじまじと見つめてしまった。

真紀はこれまで、社内の噂の的（まと）になるようなものと積極的に関わろうとはしてこなかった。むしろ噂になる類（たぐい）のことや、そういう意味で目立つような人と関わるのを嫌がるタイプなのだ。

「へえ……。たとえば、とくに誰の情報がほしいの？」

「誰でもいいわ。私の部署だと、住所とか生年月日は簡単にわかるけど、ほしいのはそういう情報じゃないのよ」

――総務課員にかかれば、どんな個人情報もダダ漏れってこと？　……怖いことを言うな。万が一にも、真紀には逆らわないようにしよう。

千尋は固く心に誓った。

「好きな食べ物とか、趣味とか。あとは、女性の好みがわかれば最高よ」

「噂話とかで、そのあたりの情報って手に入るんじゃないの？」

千尋の純粋な疑問に、真紀は悔しそうに首をかしげる。

「出るんだけどね、あーだこーだと、いろいろな説があるのよ。どれが本当かわからないの」

――歴史の文献か。邪馬台国がどこにあったのか諸説あります、みたいなやつか。

千尋は思わずツッコミを入れそうになった。

だが、真紀の珍しく真剣な表情を目にした千尋はコックリとうなずく。

「ふうん。それじゃとりあえず、まあ、頑張ってみるよ」

同じ課内にいれば、食の好みくらいはそのうちわかるだろうと考えながら、千尋はぼんやりと返事をした。

それに対して真紀は、「絶対よ」と念を押した。

2

一ヶ月後、千尋は入社して初めて五階に足を踏み入れた。

これまでは会議室がある四階までしか来たことがなかったのだ。

しかし、今日からは営業一課の人間となり、毎日ここへ来る。

「おはようございまーす」

元気に課内に入った途端、視線がざっと突き刺さる。

明らかに『誰だこいつ？』的な不信感だらけの冷たい視線が。

――うわ、なんだこの空気。

その視線に驚いて、入り口のドアの近くで固まっていた千尋を営業一課の課長が呼んだ。

「ああ、名越。こっちだ」

課長から声がかかっても緩まない冷たい視線を浴びつつ、千尋は首をかしげながら課長の席に近づいた。

「今日からお世話になります。営業事務として配属された名越千尋です」

頭を下げて自己紹介をすると、優しそうな課長はにっこりと笑った。
「ああ。即戦力になる人材だと聞いている。よろしく頼む」
「はい！」
即戦力！　その言葉を聞き、思わずにやけそうになる顔を引き締めて、千尋は返事をした。
「こっちが前任者の片瀬(かたせ)だ。彼女は新しい異動先の経理課ですでに仕事を始めている。今日は引き継(つ)ぎのために来てもらったんだ。名越は異動初日で申し訳ないが、今日一日で引き継(つ)ぎを終わらせてくれ」
千尋と同じように課長の前に立っていた片瀬さんが、綺麗(きれい)にウェーブのかかった髪を払いのけながら軽く頭を下げた。
「よろしくお願いします」
千尋が頭を下げても、片瀬さんは小さく返事をするだけでなにも喋(しゃべ)らず、ムスッとした表情を浮かべている。
——その態度はいかがなものか？　社会人としてその愛想の悪さはどうかと思うが。
異動初日から文句は言いたくないので、千尋も黙ったまま、不機嫌そうな顔で引き継(つ)ぎの説明を始めた彼女の後についていった。
営業一課は総勢二十人。彼らを補佐する営業事務は千尋一人のようだ。

経費の計算などは総務がやるので、千尋は領収書をまとめて持っていくだけ。見積書や請求書の作成、会議室の確保などの雑用が主な仕事らしい。そしてお茶汲(く)みはしない。
「自分で飲みたい時に淹(い)れるから、持ってこないでほしいって」
片瀬さんは、そう吐き捨てるように言った。なにやらそれが気に入らなかったような口ぶりだ。
——でも、それはお茶の時間に気を取られないですむし、逆にありがたいことなのでは？
彼女の不機嫌な様子ときつい物言いの原因を考えてみたが、千尋にはどうも理解できず、考えすぎて眉間(みけん)にシワが寄りそうになってしまった。
大体引き継(つ)ぎ関係の書類がないのはなぜだろう。
片瀬さんは思いついたことをその場その場で説明していて、文書の類(たぐい)を全然持っていない。千尋は一生懸命メモをとった。
「まあ、パソコンに保存してある書類を見たらわかるから」
千尋が突っ込んだ質問をしても彼女は軽く説明するだけで、大体はこんな発言で終わらせてしまった。
もう少し詳しい説明がほしい。保存書類を見ればわかると言うけれど、日常業務についていちいち書類を探して開いて読んで、みたいな悠長(ゆうちょう)なことをしている時間

なんてあるのだろうか。

商品管理課では結構綿密な引き継ぎをしたのだが、それに比べて差が激しい。

ここへ来てみて『即戦力がほしい』という言葉に、なるほどと思う。見積書や請求書、サンプルのことはわかるので、顧客の情報を覚えればなんとかなりそうだとも思う。思うが——即戦力を求めすぎだ！

「じゃ、私、仕事あるから」

「は？」

片瀬さんは、一日どころか半日もたたないうちに引き継ぎ終了を宣言した。

「お世話になりました」

「え、ちょ……!?」

お昼の時間になったのを見計らったように彼女は課長に挨拶し、あっさりと千尋を置いて異動先の経理課へと戻っていった。

「名越、そんなわけで徐々に慣れて、守備範囲を少しずつ広げていってくれ。それからとりあえず昼飯行ってこい」

いったいなにをどうすればいいんだ……

あまりの状況に呆然として佇んでいると、課長からそう優しく言葉をかけられて、千尋は休憩をとった。

ようやく周囲を見渡す余裕ができて気づいたが、営業一課には、なんと女性が千尋一人だけだった。

——いきなり男性社員に話しかける勇気はなく、初日から一人寂しく昼食を食べて、午後。

一課の全員に対して簡単な自己紹介をしたあと、本格的な業務を開始したのだった。

まあ、なんとかなるさ！　——と思って三日。

商品のことはわかるので大丈夫。会議室の予約方法も覚えたし、仕事内容もなんとなくわかってきた。

ただ一つ、大きな問題が。

「名越さん、見積もりがほしいんだけど、お願いできる？」

「はい！」

返事をしたのはいいけれど、ところであなたは誰ですか？

みんな、最初の自己紹介をして以降、自分の名前を名乗らないのだ。話し始める前にいちいち名乗らないのは当然といえばそうだが、千尋にとっては死活問題である。

——そっちは一人覚えればいいだろうけど、こっちが一度の自己紹介だけで二十人全員を覚えるのは不可能なのだと気がついてほしい。

そう、異動してきて三日たった今も、千尋は一人も名前と顔が一致していない。

見積もりを作ること自体はできても、誰から頼まれたのかさっぱりわからないのだ。

とりあえず頼んだ人を目で追っていって、着いた席を見た後に席順表で名前を確認する。

——安藤さんか。

しかし、これで「安藤さん」を覚えたと思わないでほしい。甘い。

その瞬間はわかっても、彼が視界から消えると他の人の顔が上書きされて、どれが「安藤さん」だかわからなくなるという状態を、千尋はずっと繰り返していた。

先ほどの人はタレ目の爽やか系で、普通だったら一度見たら忘れられないと思う。だが、同じようなイケメンが何人もいる。千尋には、彼らを爽やか系で〜、優しげで〜、仕事ができそう〜みたいにしか認識できない。営業一課は、そんな印象の人で溢れていた。

しかも、みんなビジネス仕様の似たようなスーツを着ている。髪型も決められているのかもしれないと思わせるほど、横分けのほどよく清潔感のある黒髪。背も、小柄な千尋から見ればみんな高く、同じようにしか見えない。

あだ名をつけて覚えようと試みてはみたものの、ぱっと見、あだ名が全然思いつかない。さっきの「安藤さん」だって、仮にタレ目と名付けても、他のタレ目を見たら、もうどっちがどっちなんだか。

並べて見れば、違う顔だということくらいはわかるのだが、もっと強烈な特徴がほしい。マッチョだとかデブだとか、それぞれ個性を出してほしいものだと、千尋はブツブツと勝手な文句を心の中で言い続けていた。

千尋からしてみると、一課の面々はあまりに特徴のない、人当たりのいい好青年たちばかりだった。

——これはマズい。ただでさえ人の顔と名前を覚えるのが苦手だというのに、どう覚えていけばいいのだろう。

「名越さん」

困ったなあと途方に暮れていると、また声をかけられた。

さっきの人は笑顔だったが、こっちの人は無表情だ。でも、当然のようにイケメン。明るい髪色で、背が高い。キリッとした眉毛に細く通った鼻筋。意地悪く笑うのが似合いそうな顔立ちである。

千尋は目の前の顔を見て、どうやったら名前と顔が一致するだろうかと考えていた。

「これできる？　明日までにほしいんだけど」

そう言って渡されたのは、商品データだった。在庫数や金額欄が空白だから、ここに数字を入れろということだろう。

「あ、大丈夫です」
書類を見て反射的に答えた。
「じゃ、よろしく」
そう言って彼は千尋が声をかける間もなく、離れていってしまった。
——マズい。名前がわからなければ、席もわからない。呼び止めて「お名前を教えてください」ときちんと尋ねればよかったのだろうが、それも失礼だろうとためらっている間に彼は外に出かけてしまった。
その背中を無言で見送った後に書類に視線を落とす。これは商品管理課でしていたような仕事なので、すぐ終わらせることができる。
まあ、終わらせとけば、明日には「できてる？」くらいは聞いてきてくれるだろう。
机の空き状況から判断して……今の人は『鈴木』さんということにしよう。
千尋は、周りに気づかれないように小さくため息をついた。
とりあえず、顔と名前を覚えるのが一番の課題だ。

次の日。
「ちょっと、名越さん」
いきなり朝からイラついた声で名前を呼ばれた。

振り返ると、腰に手を当てて眉間にシワを寄せた男性が立っていた。
「昨日の書類はまだ？」
「——ああ！」
「できてます。どうぞ。あの……」
思わず手を叩きそうになった。うん、この人は見覚えがある。暫定『鈴木さん』だ。
「次からは机の上に置いといてくれればいいから」
「お名前を教えてください」と尋ねようとした千尋が口を開く前に、彼は踵を返してしまった。そしてまた、昨日と同じくフロアを出ていく。
——だからその机がわからないんですってば！　そのまま机に戻って座ってくれませんかね!?
当たり前だが、そんな千尋の心の叫びはまったく無視して『鈴木さん』は行ってしまった。
千尋は理不尽さを感じながら課内を見回してから、『まあでも、鈴木さんでいいか』と思うことにした。
それから二週間が経った。千尋は困り果てていた。
今のところ席に座っていない状態で区別がつく人は課長しかいない。

——絶望的だ。なぜだ。なぜあの人たちは名前を名乗ってくれないんだ。

異動してからすでに二週間も経っている以上、この期に及んで名前が聞けない。頼まれた仕事を渡すことができず、まさに処理済みの書類の山に埋もれている状態だった。

そんな時に真紀から昼食のお誘いがあった。自己嫌悪に陥りすぎて話を聞いてほしかった千尋は、喜んで応じた。

約束の昼休みを迎え、喜び勇んで社食に向かう。

「どう？　仕事は順調？」

千尋の落ち込んだ様子を見て、真紀がニヤニヤしながら聞いてきた。

「うん。仕事は大丈夫」

「でしょうね」

真紀は含み笑いをしていた。千尋が人の顔を覚えるのが苦手なことを知っているのだ。

もちろん、仕事だって覚えなきゃいけないことは多くて大変だった。

電話はたくさんかかってくるし、言葉遣いも気をつけないといけない。商品だけを相手にしている商品管理課とは、仕事の質が大きく違う。

しかしそんな苦労を上回る、同じ印象の顔、顔、顔……

「社内にいる時は、名札をちゃんとつけてくれないかなあ」

事務員は名札をつけているが、外回りが多い営業は、基本的に名札をスーツのポケットにしまい込んでいる。帰ってきても、外に行った状態のままになってしまっているのだ。

千尋は、深いため息を吐いた。

「ねえねえ、そんなことより！」

——そんなことって！　こっちは結構深刻なんだけどなあ。

いつもと同じようなやり取りにがっくりして、千尋は情けない顔を真紀に向けた。

「私の愚痴を聞いてくれるんじゃなかったの？」

「仕事がなんとかなってるんなら大丈夫でしょ。それよりさ」

「なに？」

「御三家、いた？」

真紀が目をキラキラさせて聞いてくる。

そんなことを異動前に聞いた覚えもあったが、すっかり忘れていた。

しかも、理解してもらえたと思っていたのだが。今現在、一課の人たちの名前と顔が全然一致していないと。

「誰が誰だかさっぱりわかんないよ。そういえば、御三家って名前なんていうの？」

基本情報すら頭に入っていなかった。

あの似たり寄ったりの顔の中から、名前も知らない状態で御三家を抽出するのは至

難の業だ。
「ええ？　一目見ればわかるんじゃないの？　『きゃあ、すごいイケメン！』とかって」
似合わない言葉遣いを途中に挟みながら、真紀がグッと身を乗り出してくる。
「一目どころか何度見たって、みんな同じ顔に見えるよ」
「御三家はね、田中……安藤………宇都宮って名前よ」
真紀が視線を宙に向けて指を折りながら、たどたどしく三人の名前を口にする。
千尋は真紀にジト目を向けた。
「真紀、なんで御三家に興味あるの？」
「そりゃあ、お金になるもの」
びっくりする返事が戻ってきた。
「お金！　……ってまさか真紀、私が仕入れた情報売ろうとしてたの!?」
——おかしいと思った！　その手の話には興味のなさそうな真紀がイケメンの情報をほしがるなんて！
真紀を睨みつけると、誤魔化すような笑みを浮かべた彼女は千尋の目の前でヒラヒラと手を振った。
「まあまあ。御三家の女性の好みがわかればランチご馳走してくれるって言うのよ〜。乗らない手はないでしょ？」

同意を求められても、千尋にはなんの得もない。苦労して情報を取ってくるのはこっちにもかかわらず。
「ほら、千尋だってイケメンの情報ほしいでしょ？　絶賛彼氏募集中なんだから。一石二鳥ってやつよ」
わざとらしくにっこり笑った真紀を、千尋は睨みつけた。
——なにが一石二鳥だ。名前と顔が一致しない人間を誰が好きになるというのか。大体向こうにしてみれば、どうせ千尋はちんちくりんにしか見えてないに決まっている。
「そういうわけで、早めに仲良くなってよ」
真紀の笑いを含んだ適当な言葉に、千尋はテーブルに突っ伏した。
「無理だよう。誰が誰かわからないよう。みんなイケメンだよう。もう同じ顔ばっかり！」
「ええ〜〜？　そうなの？　目が腐ってんじゃないの？」
なんて言い草だ。
「もう、名前だけじゃわかんないよ！　田中に関しては、多分二人いたもん」
「下の名前はさすがに覚えてないわあ」
さすがにじゃない。真紀も御三家そのものに興味がないから覚えてないのだ。
「二人の田中を並べて、格好いいほうが御三家よ、多分」

「その格好いいの基準は、私の好みでいいの？」
ため息交じりで呟(つぶや)いた言葉は、真紀にあっさりと却下される。
「ダメ」
——んじゃ、どうしろっていうんだ。
「一般的によ、一般的に。千尋の好みは『覚えやすい』っていう主観が入るからダメ。あ〜、イケメンがたくさん身近にいるっていう恋のチャンスを活かせそうになくて可哀(かわい)想(そう)だわ」
千尋は真紀に苦々しい顔を向けた。
自分が覚えられない顔の人と恋愛するなんて、明らかに無理だろう。
「一般的に」というのがどういう系統のものを指すか知らないが、仮に一課の二十人を全員並べたとしても、みんながみんな御三家を選ぶものだろうか。だったら……
「私、一般的な好みなんて持ち合わせてないもんね」
「——ぶはっ」
やさぐれた千尋の言葉に返事をするように、机を挟(はさ)んだ向こう側から笑い声が聞こえた。そちらに目を向けると、イケメンが座っていた。
——この人は……覚えがあるような気がする。一課の人間だ、多分。
自分の記憶が確実ではないことに、千尋は悲しくなった。

「や、悪い。面白い話してるから」
箸(はし)を持ったままの手で口元を押さえ、彼は肩を震(ふる)わせて笑っていた。
なにがそんなに面白かったのか、千尋にはよく理解できない。
それより先に真紀が反応して千尋に耳打ちしてくる。
「知り合い？」
——そう。多分、同じ課の人。でも名前がわからない。見覚えがあるけれど、どうしよう。
そんなことを考えていると、さっさと真紀が彼に話しかけていた。
「営業一課の方ですか？　お名前を教えていただいてもいいですか？」
自分が二週間かけてできなかった質問をあっさりとしてしまう真紀の隣で、千尋は口を尖(とが)らせながら、目の前の彼の顔をじっと見た。傍(はた)から見ると睨(にら)みつけたような状態になっていたかもしれない。
なんとなく悔(くや)しくて、彼が答える前に名前を当てたくなった。
そんな千尋を、彼は面白いものでも見るように目を細めて眺(なが)めていた。
この人は見覚えがある。
——そうだ、暫定(ざんてい)……
「鈴木さん！」

千尋はビシッと人差し指を立てて呼んだ。
「はずれ」
彼から無情な答えが返ってきた。
「え、じゃあ佐藤さん」
首を横に振っている。
「高橋さん」
またも無言で首を横に振られて、千尋はやる気をなくした。無理、当たる気がしない。
「伊藤さん、渡辺さん、山本さん……」
「多そうな苗字、手当たり次第言っているだけよね」
真紀の突っ込みに、またもや目の前の彼は肩を震わせる。
「もう、わかりません！　でも、この間、朝データを取りにきた人ですよね？」
「ああ、なんだ。わかってるじゃないか。そうそう。田中です」
「田中！」
そんな多い苗字を忘れるなんて不覚だ。あと数個言わせてくれたら当たったかもしれないのに。
「きゃあ。御三家のほうの？」
真紀が嬉しそうな声を上げる。

やっぱり、真紀も御三家の外見を知らなかったらしい。
それを訴えようとする千尋と押しとどめる真紀が無言で揉み合っていると、彼が席を立った。
真紀のほうを見て苦笑いしながらうなずいている。
この人が例の御三家か。とりあえずこの人だけでもしっかり覚えようと千尋が顔を見ていると、彼が自分のトレーにのっていたプリンを千尋の目の前に差し出した。
「ランチと交換するほどの情報はあげられないけど、これをあげる」
千尋は慌てて両手でプリンを受け取る。
「自己紹介もせずに苦労させて、ごめんね？」
なんと、謝ってくれた。しかも笑顔で。
明らかに面白がっているものであったとしても、笑顔を目にすると今までのイライラがちょっとは晴れるというものだ。
というか、さっきまで、この人の話を目の前で繰り広げてしまっていたことを今さらながら思い出して恥ずかしくなる。しかし受け取ったプリンの魅力にそれも掻き消えた。
ランチの陰の主役ともいえるデザートを差し出してくれるとは！　なんていい人！
「うわあ。ありがとうございます！　鈴木さん！」
千尋は満面の笑みでお礼を言った。

「田中」
彼は笑顔から一転、眉間にシワを寄せて訂正を入れた。しまった、ちょっと間違えた。
一度インプットすると、なかなか変更がきかないのは困ったものだ。が、しかし！
手の中のプリンをニコニコしながら眺めて、千尋は自信満々に答えた。
「大丈夫です。もう覚えました。プリンの田中さん！」
ドヤ顔で胸を張ると、横と上からため息が返ってきた。が、そんなのは気にしないことにしよう。

3

営業一課の前任の事務員・片瀬は『最悪』の一言に尽きると田中宗介は思っていた。
決して仕事ができないわけではない。頼めば必ず期日までに終わらせるし、ミスもほとんどない。
ただ、すごく面倒くさかったのだ。だから宗介は、営業事務の女性にはかなりの警戒心を抱いていた。
――たとえば片瀬に仕事を頼んだ場合は、こんなことになる。

「片瀬さん、頼んでいた見積もりできてる？」
「もちろんです」
ハートマークを飛ばしながら嬉しそうに振り返られると、正直うんざりする。
仕事の依頼も受け取りもすべて、彼女に直接話しかけないことにはなにもしてもらえない。メモを残しているだけじゃ、「見ていません」で押し切られてしまうのだ。
ただ依頼を直接するだけならいい。そのほうが確実だという点でも異論はない。
だが……
「あのう、今夜食事一緒に行きませんかあ？」
必ず誘われることがついて回る。
「今日は無理なんだ」
「だったら、いつにします？」
断っても、性懲りもなく何度も誘ってくるのだ。一度でも付き合ったらダメだと思ってOKしたことはないけれど、ただ見積書を頼んだだけでそれでは、時間がいくらあっても足りない。
さっさとその場から立ち去りたくても、自分がほしい書類は彼女の手の中なのだ。
「悪いけど、急ぐんだ」
繰り返されるやりとりにいい加減疲れてきて、断りの言葉もはっきりと言うように

なった。
もちろん、自分だけではなく他の社員も。
そのことに、彼女は不満を感じていたらしい。
そんな彼女は、次の言葉を放ったのを最後に、営業一課を去ることになった。
「一緒に食事してくれないなら、もう見積もり作ってあげません！」
仕草だけは可愛く、ぷいっと顔をそらされた。
呆(あき)れ果てて反論しようとしたところで、怒声(どせい)が響いた。
「なんだ、その態度は！　お前のしていることはセクハラだ！」
席の離れた課長にまで聞こえていたようで、先ほどの彼女の言葉に課長は立ち上がって怒っていた。
「仕事を盾(たて)にして交際を迫るとはどういうことだ。だったら、お前はいらない。出ていけ！」
温和な課長が怒るところは滅多(めった)に見たことがない。
「そんなっ、私は……」
片瀬が身を震(ふる)わせて声を上げたが、課長の一睨(ひとにら)みで黙る。
「もういい。出ていけ」
一歩も引かない課長に、彼女は手に持っていた見積書をゆっくりと机にのせて静かに

退室していった。
営業事務がいなくなる。
それはすごく大変なことだけれど、室内にはどこかホッとした雰囲気が流れた。
「後任は……既婚者にお願いする」
課長が苦々しい口調で呟(つぶや)いた。
『営業一課にはイケメン御三家がいる』
社内にそういう噂が流れていることは宗介も知っていた。
決して自分からそう名乗っているわけではないが、宗介もその一人として名を連(つら)ねていた。
そんな宗介に話しかけられることを、片瀬はある種のステータスのように感じていたらしい。だが、その彼女もそんなことがあって一課からいなくなった。
その一ヶ月後、新しい営業事務が入った。
「おはようございまーす」
ようやく、忙しすぎる地獄の日々から少しは解放されると思っていたのに、可愛らしい声で入ってきたのは、どう見ても二十代前半の女性。
——既婚女性はどうなった？　それとも彼女は見た目によらず既婚者なのか……？

期待した目を課長に向けても、申し訳なさそうに首を横に振られた。

「今日からお世話になります。営業事務として配属された名越千尋です」

にこにこと元気よく挨拶する姿には好感が持てたが、納得いかなかった。

加えて、課長に怒鳴られてから一課にはほとんど足を踏み入れていなかった片瀬が、引き継ぎのために来ていて、それも宗介を苛立たせた。

名越と名乗っていた女性が、片瀬の不十分な引き継ぎに目を白黒させている様子が見て取れた。

課長に目を向けると、深いため息をついて宗介を手招きしている。

宗介は課長の席に近づいた。

「悪い。後任も若い独身の女の子だ」

――そうだと思った。思わず顔をしかめると、課長はあの女の子が異動してきたわけを話した。

「ドロドロ三角関係はやめてほしいんだとよ」

つまり、既婚や彼氏持ちの女性が、御三家と付き合えるのなら夫や恋人なんて捨てるわ～♪　みたいな感じにならないようにという上層部の判断らしい。

――そんな起きてもいない色恋沙汰を心配するよりも、今、目の前にある仕事を優先すべきだろう!?

そう叫び出したい気持ちを課長もわかってくれているようで、もう一度「すまない」と頭を下げられた。課長にそこまで謝られて、さらにそれ以上の文句を口に出せるはずもなく、宗介は黙るしかなかった。

サポートしてくれる事務がいないままで一課の仕事をこなすのは、やはり非常に難しいし、何度か顧客を大きく待たせることにもなった。

「明日には見積もりを出しますので」と言えないのだ。

若い女性はたいていが面倒くさい。新任の彼女だって見た目は小さくて可愛いが、面倒くさいに決まっている。

「あれでも、色恋に興味がなさそうで、即戦力になるという条件をクリアしてきた子だから」

課長はそんな風に言ったが、見た感じはいたって普通の女の子だ。

だったらいっそのこと男にしてほしかったが、残念なことに、技術職に男が多いのと同じように事務員には女が多い。

苦々しくてやりきれない思いで、宗介はすべての文句を心の中にしまい込んだ。

そして三日後、ついに彼女に仕事を頼まなければならない時がきた。

「名越さん、これできる？　明日までにほしいんだけど」

「あ、大丈夫です」
話しかけてみると、ニコニコと愛想よく受け答えをする。頼んだ商品のこともよくわかっているようで安心する。
商品データを渡して立ち去ろうとすると、問いかけるような視線を感じた。
大きく息を吐きたくなるのをこらえ、イライラして刺々しくなった気持ちを落ち着かせるために喫煙室へと向かった。
——やっぱり、彼女も片瀬と同じ。もう、うんざりだ。

次の日、宗介は自分の感情をはっきりと表情に押し出して彼女に話しかけた。
「昨日の書類はまだ？」
自分の声がイラついているのがわかる。
まだ一課に来て日が浅い彼女に対して、いくらなんでもこの態度はないだろうと宗介も思う。しかしこれまでの面倒くさいやりとりの積み重ねで、これ以上はもう我慢ができないところまできていた。
「——ああ！　できてます。どうぞ。あの……」
わざとらしく、忘れていたというような態度を装って、彼女が書類を差し出してきた。
すべてが計算された演技のように見えてしまう。

「次からは机の上に置いといてくれればいいから」
彼女がなにかを話そうとするのを遮って、書類だけを受け取って外回りに出た。
——書類の作成も、ここ一ヶ月は一人でできたんだ。これからも自分でやろうか——
そう考えながら、重い足を引きずって営業に回った。

それからの二週間は、幸いなことに一人でできる仕事が続き、彼女に話しかけられることもなく過ごせた。
今日は午前中に取引先で打ち合わせをして、帰社したのはちょうど昼休憩の時間帯。
社員食堂が一番混む時間だが、午後からまた外出予定があるので仕方なく向かう。
これなら外で食べてくればよかったと思いながら、仕方なく女性社員の向かいの席に座った。そこしか空いてなかったのだ。
「うん。仕事は大丈夫」
聞き覚えのある声に目を向けると、なんと営業事務の新任、名越が目の前にいた。
——なんてこった。
大いに後悔していると……
「社内にいる時は、名札をちゃんとつけてくれないかなあ」
辛そうな声が聞こえた。名札？　なんのことだと思っていると、名越の隣に座ってい

る女性が弾んだ声を上げた。
「ねえねえ、そんなことより！　御三家、いた？」
その言葉に、ムカッとする気持ちが腹の底から湧き上がる。
――本当に、こいつらはなにをしに会社に来ているんだ。
『俺は仕事をしに来ているんだ。それを邪魔しないでくれ』と怒鳴りつけたい気分だった。
彼女の受け答えによっては、イライラを抑えきれずに椅子を蹴り倒して立ち上がっていたかもしれない。
この後のやり取りを聞かなければ、たぶんずっと彼女のことを誤解したままだっただろう。
「誰が誰だかさっぱりわかんないよ。そういえば、御三家って名前なんていうの？」
「ええ？　一目見ればわかるんじゃないの？　『きゃあ、すごいイケメン！』とかって」
この二人は御三家が誰だか知らないのか？　と思っていたら、名越がテーブルに突っ伏した。
「みんなイケメンだよう。もう同じ顔ばっかり！」
「ええ～～？　そうなの？　目が腐ってんじゃないの？」
そう言いながらも、二人は目の前にいる自分に目もくれない。本気で宗介のことがわかっていないのだ。

この二人の話を小耳に挟んだ女性社員が微妙な視線を宗介に向けてくる。まあ、本人の目の前で噂話を繰り広げているんだから、当然の反応だ。
金になるから情報を取ってこいと情報源の目の前で会話を繰り広げているなんて、彼女たちは露ほども思っていない。
しかしそんなことよりも、名越はまだ一課の人間の名前と顔がさっぱり一致してないらしく、初対面の人間に仕事を頼んだら名前ぐらい名乗れと憤慨していた。
自己紹介……初日に挨拶くらいはした、はずだ。
適当に苗字だけ言ったような気がする。
周りはみんな好き勝手に「御三家」呼ばわりしてあれこれ噂話をしてるから、名越もどうせ知っているんだろうという気持ちだったことも思い出した。
彼女の言葉を聞きながら自分の行動を思い返して、ひどく申し訳なく思った。彼女が宗介の名前を尋ねる時間など与えなかった。というか、名越がなにかを話そうとしていたのをわかっていて、それを遮った。
「もう、名前だけじゃわかんないよ！　田中に関しては、多分二人いたもん」
田中……もう一人の田中は、メガネをかけている。宗介はそのもう一人の田中と似ているとは一度も言われたことがない。

「二人の田中を並べて、格好いいほうが御三家よ、多分」
「その格好いいの基準は、私の好みでいいの？」
「ダメ」
——どっちが御三家かと聞かれて……わからないのか？
思わずもう一人の田中に対して失礼なことを考えてしまって反省する。別に自分のほうが格好いいと思われたいわけではないが、心のどこかにそういう気持ちがあったのかと少し戸惑った。
「一般的によ、一般的に。千尋の好みは『覚えやすい』っていう主観が入るからダメ」
「……私、一般的な好みなんて持ち合わせてないもんね」
名越のぶすくれた返事を耳にして、抑えられずに思わず噴き出した後、思い切り笑い出してしまった。
すると宗介の笑い声に、驚いたように顔を上げた名越と目が合う。
その瞬間、「あっ！」という顔をしたものの、眉間にシワを寄せて考え込んでいる。
「この人は見覚えがある」とその表情が語っていた。
もう一人の女性が急かすのを押しとどめて、名越は真剣に考え込んでいた。
別に目の前にいるのだから名前を聞いてもらっても一向に構わないのだが。そう思いながら彼女を見ていると、どうやら名前を思い出したらしく、急にぱあっと明るい表情を見せた。
その笑顔が可愛くて不覚にもドキッとしてしまった……が。
「鈴木さん！」という、残念な答えだった。
——鈴木って、もっと年配だろう。俺とはまったく違う。ああ、でも席は近い。座席表を頼りに、当たりをつけていたのだろう。
その後、一度外してしまってやる気をなくしたらしい名越は、当てずっぽうでいろんな名前を言った。
それにしても、彼女たちの会話は面白い。笑いを噛み殺すのに苦労する。
「もう、わかりません！　でも、この間、朝データを取りにきた人ですよね？」
唇を尖らせてから出た言葉に、お！　と思わず眉が上がった。
「ああ、なんだ。わかってるじゃないか。そうそう。田中です」
ようやく自己紹介をすると、二人とも驚いた顔をしている。
「田中！」
「きゃあ。御三家のほうの？」
やっぱり顔と名前を知らなかったらしい二人がじゃれているのを見ながら、思った以上に時間が経っていることに気がついた。午後からの打ち合わせに出る前に、必要な書類をまとめてしまいたいと思い、宗介は席を立つ。

ふと視線を落とすと、トレーの上に今日の定食のデザートが手つかずのまま残っていた。

宗介はとくに深く考えずに、なんとなくそれを名越に差し出す。

すると、向こうも条件反射のように手を差し出してきたので、その手の上にプリンをのせた。

「自己紹介もせずに苦労させて、ごめんね？」

今まで彼女に対して失礼過ぎる態度を取っていたことは宗介も自覚している。こっちの先入観だけで、しなくてもいい苦労を彼女にさせてしまったのだ。

プリン一つでそれが許されると考えたわけではなかった。ただ、目の前にあったから、とりあえず渡してみようと思っただけだ。

「うわあ。ありがとうございます！」

それが、こんなに満面の笑みで受け取ってもらえるなんて、想定外だった。

「鈴木さん！」

この言葉がなかったら、宗介は名越の可愛さに赤面していたかもしれない。

「田中」

即座に切り返した。今、教えたばかりだよな？　覚える気がないだろう？

しかし彼女はちゃんと覚えたので大丈夫だと、自信満々のドヤ顔を見せた。

そうして『プリンの田中さん』というあだ名を言い渡されたのである。

プリンを渡さなかったら、自分はしばらく名越にとって『鈴木さん』のままだっただろう——宗介はそう思った。

4

社員食堂での一件から一週間。千尋の職場環境は劇的によくなっていた。

「プリンの田中さん、見積もりができました」

「いい加減、その呼び方はやめろ」

形のいい眉をひそめながら、彼は千尋を振り返った。

愛想のなかった彼が、社員食堂で話して以来、とても感じのいい人に変わった。といっても、表情がよく変わるようになっただけで、優しく笑いかけてくれたりするわけではない。

どうやら彼があれほど無愛想だったのは、前任者の片瀬さんが原因と判明した。彼女が不必要に接触を持とうとしてきたため、千尋もそうなのではないかと警戒（けいかい）していたらしい。最終的には課長が彼女の態度にキレて、千尋がここへ来ることになったわけだが。

――あの課長、キレるのか。……是非とも怒らせないようにしたい。

「最初からこの人数を覚えられるわけないよな。悪かった」

しかもただ謝ってくれただけではなく、全課員に『まだ名前を覚えてないみたいだから、彼女に渡す書類に付箋を貼って、そこに名前を書いてやって』と言ってくれたのだ！

　すると、名前の付箋がついた書類が千尋のもとに集まるようになった。そのおかげで、仕事の速度が急激に上がったことは、もちろん言うまでもない。

　処理済みの書類で埋もれていた千尋の机は、あっという間に綺麗になった。最近では鼻歌を歌いながらコーヒーを飲む余裕まであるのだ。めでたい。

　ただし付箋で名前がわかるようになったので、作成が終わった見積もりなどを担当者の机の上に置いて終わりということもある。だから、頼んできた人と顔を合わせないまま仕事が終了したりもする。異動して一ヶ月が経つというのに、いまだに顔と名前が一致しない人が多数いることは、ちょっとした弊害だったりもするが、それもまあ大事の前の小事ってやつだ。

　そんな状態の中、あだ名をつけてでも名前を覚えようとしているこの努力を買ってほしい。千尋はそんな風に思いながら、さりげなく反論した。

「もう一人の田中さんと区別するためです」

――そう、やはり田中さんはもう一人いたのだ。ちょっとまだ顔がおぼろげで見分けるのに自信はないが、確か優しげな印象の人だったはず。

「下の名前は違うだろう!?」

「この上、ファーストネームまで覚えろと言うんですか!?　なんて鬼畜！」

　天を仰ぐ千尋を睨みつけてから、プリンのほうの田中さんは見積書に視線を落とした。

「覚えてないのか」とぽつりと寂しそうに言ったのは聞こえなかったふりをしよう。今の千尋はこれでいっぱいいっぱいなのだ。

　フルネームはいつか、きっと、多分、……覚えるだろう。そういうことにしておこう。

「名越、これのサンプルあるかな?」

　田中さんが見積書の一番上を指差して言った。

　彼が示したのは、新発売のボールペンの欄だった。

　千尋が異動後に発売された商品で、完成したものはまだお目にかかっていない。時間を見つけて実物を見せてもらいに行こうと思っていた。

「今月初めに届いているはずですが、確認しておきます。どれくらいの量が必要ですか?」

　顧客名簿をめくっている彼から大体の数字を聞くと、千尋はそれを商品管理課にメールすべく、メモを取る。

「在庫があれば、午後にでも持ってきます」
是非行かせていただきたい。新商品を手に取る時は本当にワクワクする。
田中さんは「じゃあ、頼む」と言った後、ニコニコと笑っている千尋を見て――
「……仕事はできるのに」
と心の底から残念そうに呟いた。
――そのセリフは、感心したように言ってくれてもいいのではないか？
千尋は、今こそこの文房具への愛と情熱を語る時だと、拳をグッと握りしめた。
「だって、愛してますもん！」
「………は？」
目の前のイケメンがとぼけた顔になったけれど、そんなことはどうでもいい。ようやく巡ってきたチャンス（？）なのだ。逃してなるものかと、千尋は意気揚々とその愛の大きさを語り出した。
「あのボールペン、実は初期段階ではなんの変哲もない、ただのボールペンでした。通常のボールペンは学生や会社員をターゲットにしているでしょう？ しかしなんとこのボールペンは、主婦に的を絞ったのです。今まで主婦向けの文房具なんてあったでしょうか？ 主婦だって文房具はよく使うんです。そこに目をつけて、このボールペンの改良は進みました。まずは低価格販売を狙って低コストを心がけたんです。なぜなら値段が高いボールペンなんて、家計を預かる主婦は絶対と言っていいくらい買わないから。徹底的にコストを抑えて低価格を死守し、しかもデザインはおしゃれでないといけない。なぜなら女性は幾つになっても持ち物にこだわるところがありますからね。さらに女性の服には胸ポケットがついていないものが多いから、持ち歩く時はたいてい手帳に挟みます。そのため、まずこのクリップ部分を強力にして――」
「待て待て待て。この話は、いつ終わるんだ」
目の前で手を振って制されて、千尋は語りを中断した。
周りからびっくりした目で見られていることに気がついて、千尋は思わず照れ笑いをした。ちょっと熱くなりすぎたようだ。声も大きかったらしい。
「久々に愛する文房具たちの話ができるかと思って、つい……」
そう言って千尋が頭を下げると、田中さんは口を手の平で覆った。
「ちょっと驚いた」
そう言った彼まで恥ずかしがっているのはどういうわけだろう？
しかも見積書で顔を覆って、ため息までついている。
「わかった。サンプルよろしく」
田中さんは千尋を恨めしそうに見てから、もう行くとばかりに手を振った。
なにかしてしまったのだろうかと千尋は首をかしげて少し考えてみたが、これといっ

立ち読みサンプル
はここまで